

広島経済大学経済研究論集
第31巻第3号 2008年12月

日本統治下朝鮮の鉱業生産統計の推計

原 康 宏*

1. 問題の所在

この論文の目的は、韓国⁽¹⁾に関する鉱業生産統計を、道別統計を利用して吟味し、その現在の韓国領域に対応する地域における鉱業生産水準を解放後の韓国のそれと対比することにある。この作業は一橋大学経済研究所を中心に進行しているアジア地域長期経済統計作成プロジェクト（「COEプロジェクト」と略記）の一部を構成するものであり、筆者は日本の植民地であった期間から2000年にいたる期間の韓国および台湾の鉱工業の推計作業に従事してきた。その主要な成果は、筆者の博士論文原康宏（2008）「台湾・韓国における鉱工業長期生産系列の吟味」、広島経済大学学位請求論文に公表した。ただ解放前の韓国鉱業については、データの制約から暫定的な結果にとどまっていた。植民地支配下にあった韓国の鉱山は当時の「日本帝国」の鉱業生産の中でかなりの地位を占めており、同時期の台湾の鉱業生産がほぼ石炭のみに限定されていた状況と比較すると、韓国の鉱業生産の検討は、より重要である。さらに解放前後をカバーする長期系列を作成するには、解放前の対象鉱山等の統計を現在の韓国領域内のものとそれ以外に分割する必要があるが、このためには道別の統計を利用する必要がある。このような理由から、博士論文作成以後に得られた情報も加えて再検討を行うことにした。

最初に韓国鉱業に関する統計を展望しておく。国際産業分類による鉱業には、通常鉱山によって営まれる「狭義の鉱業」と、鉱山以外の自然資源の採取業より構成される。前者は、

- (1) 石炭鉱山、
- (2) 金属鉱山（鉄鉱、金銀銅鉱等）、
- (3) 非金属鉱山（明礬鉱、珪砂等）

よりなり、独立の事業所によって経営されることが多い。後者の主体は土石採取業、天然塩採取業等から構成される。

* 広島経済大学非常勤講師

このうち狭義の鉱業統計は、多くの国で比較的信頼性の高い統計であるとされている。鉱山の安全管理が不可欠なこともあって、主要鉱山はもちろん、中小鉱山も行政の監督下にある場合が多い。このために、鉱山設備等のストック情報や、製品別生産量、従業者数等のフロー量に関する報告が行政当局に提出され、所管官庁によって集計・公表されるのが通常である。

解放前の韓国でも例外ではない。当時の韓国で経営されていた鉱山からは、朝鮮総督府が定めた「朝鮮鉱業規則」に基づいた報告が提出され、総督府殖産局鉱山課⁽²⁾等が取りまとめて統計を作成していた。この結果は、鉱業についてのほぼ全数調査とみなし得るものであるが、集計結果の時系列変化をみると特定年度だけ生産額が欠落している産品もあり、非金属鉱業の調査対象範囲が年次によって異なる等、必ずしも完全なものとはいえない。この欠落の原因が報告の不備によるものか、集計作業段階で発生したかを明らかにするには鉱山別の記録等を参照するなど膨大な作業が必要である。しかし、本論の目的である国民経済計算推定のための資料としては、欠落部分は限定的であり、いくつかの例外を除けばその影響はそれほど大きくない。1910年以降1936年までの期間については『朝鮮総督府統計年報』（以下『統計年報』と表示）に鉱産物として公表されるとともに、別途

朝鮮総督府殖産局鉱山課『朝鮮鉱業の趨勢』（以下『趨勢』と表示）に発表されている⁽³⁾。『趨勢』の数字は『統計年報』にみられる問題点を修正した「確定値」と考えられることから『統計年報』の数値より信頼性があるとされており、2者の相違があるときは前者が利用されることが多い。特に鉱産物合計の『趨勢』の値が『統計年報』の合計を上回る年があることに注意が必要である。この2者の相違は主として非金属鉱に関連しており、相違が大きい場合には前者に合わせるような調整が必要となる。ただ『趨勢』には道別製品別生産量が示されていない点で本論の目的には不便であるので、必要な調整を加えながら『統計年報』を利用することにする⁽⁴⁾。既述のように『統計年報』で情報が得られるのは、1911～1936年に限定される。戦前の日本では太平洋戦争に備えて、本国および植民地の鉱業生産統計の公表を1937年以降中止していた。このため『統計年報』では1937年以降の鉱業生産の数字を秘匿扱いしていたが、その後も出版物を極秘扱することを前提として統計が作成されており、仮印刷等の形で配布されていたようである。より公表に近いものとして、一部の鉱業生産情報は「物動計画」用に作成された統計表をあげることができる。この情報の一例は表1に示されている⁽⁵⁾。韓国落星台研究所の研究プロジェクトの中で、朴基柱（2006）は、仮印刷の形で保存されている1941年版の『趨勢』を発見し、1937～40年に関する韓国鉱業の推計の分野で大きな貢献をした⁽⁶⁾。本論でもこの『趨

表1 太平洋戦争中の朝鮮鉱業生産

	数量	1937 実績	1938 実績	1940 実績	1941 実績	1942 計画	1943 計画
普通鋼鋼材	t		75262				
普通鉄	t		286693	233842	278432	396000	356000
普通鋼鋼塊	t		93602	93117	116543	130000	130000
鍛鋼	t		4001	3627	4316	5000	5800
鑄鋼	t		7432	10894	10795	13000	14200
特殊鋼鋼材	t		6202	2774	3581	4500	6000
フェロアロイ	t		1454	1533	2291	3000	108000
アルミナ	kg		700				
アルミニウム			312				
マグネシウム	kg		86				
石炭	1000 t		5171	6108	6802	7100	7800
有煙炭	1000 t			2639	2854	3000	3300
無煙炭	1000 t			3469	3948	4100	4500
銅	t	4900	11862	2900	3782	3500	4000
鉛	t		9178	7700	7819	8000	10000
亜鉛	t	6900	20	6500	5996	7000	10500
金	kg	24700	29614	26257	23040	22000	8000
螢石	t	8100		24620	35516	50000	55000
雲母	t	90		80.7	90	170	180
鱗上黒鉛	t	5700		21112	19908	25000	27000
土状黒鉛	t	3500		73409	48732	72000	73000
鉄鉱石	t		939886	1185426	1692911	2700000	333000
硫化鉄鉱		35400		209751	215741	280000	310000
タングステン鉱	t	1600	4033	4521	4656	5500	5800
コバルト鉱	t					15000	32800
ニッケル鉱	t					21900	30000
モリブデン鉱	t		182				

企画院第2部(編)『日満支重要物資生産実績調：昭和13-17年度』

勢』を利用するが、本文中に述べられるように、『趨勢』からは道別品目別の数値が得られないため、『統計年報』と同様の数値チェック等は困難であることから1937年以降の数値については、仮推計である。

鉱業に関する統計調査組織は解放後の韓国についても維持されており、狭義の鉱業に関する統計の精度は高く、かつ解放前の数字と直接比較が可能である。鉱業に関する統計は、朝鮮戦争下の1951年と1952年についての情報が

公報処統計局『大韓民国統計年鑑 檀紀4285年(創刊号)』1952

に公表されているが、第2次世界大戦と朝鮮戦争による混乱期の数字であることを考慮すると、信頼性については留保が必要である。この点からすると、信頼できる統計は1954年以降といってよい。これに加えて、1955年には鉱工業センサスが実施されて、鉱業についても事業所ベースの統計が組織的に集計されるようになった結

表2 土石採取金額

	総数	京畿道	忠清北道	忠清南道	全羅北道	全羅南道	慶尚北道
	数量(貫)						
1933	80185217	16358550	79930	1610830	1378270	10014100	1745860
	金額(円)						
1933	470591	115161	7899	2959	17607	72055	35745
1934	910845	172787	4239	13726	37705	128548	43890
1935	1017387	209658	4040	17592	31159	260131	145145
1936	1838614	324915	1370	12835	14777	378792	143739
1937	1826143	195629	2368	51589	55073	477526	161355
1938	3993676	267944	73160	118217	96426	434996	325625
1939	6144585	951457	53935	11281	70072	88421	1038666
1940	12031779	8131440	53577	12382	66474	145614	257413

	慶尚南道	黄海道	平安南道	平安北道	江原道	咸鏡南道	咸鏡北道
	数量(貫)						
1933	4853300	5244496	1377274	2880800	66300	14313395	20262112
	金額(円)						
1933	25200	18220	100255	25687	14580	9859	25364
1934	29713	22917	30851	187953	2041	6737	229738
1935	27456	17256	127823	73730	1597	7353	94447
1936	30125	27328	273629	284420	10502	16303	319879
1937	11314	52146	250488	249338	11068	26253	281996
1938	22404	43295	323588	175063	2197	13413	2097348
1939	84511	57311	369632	449758	223531	487015	2258995
1940	27669	98663	409822	357948	77129	68953	2324695

(出所) 『統計年報』(昭和8年-15年版)

果、鉱業の統計もセンサスにウエイトが置かれるようになった。さらに、実質生産の変化を把握するための鉱工業生産指数が公表されるようになった。従ってわれわれの作業としては、解放後の一時点をベンチマーク年とし解放前価格ベースの実質生産額を推定し、解放後の公式系列に接続することが残されることになる。

解放前の韓国の鉱業は金銀鉱、鉄鉱等の金属鉱と石炭が中心であり、1930年代後半に急速な発展をみた。この期間に関する鉱業生産は韓国のGDPの中で無視できない比重を占めていた。解放後の韓国では、解放前と比較してGDPに占める狭義の鉱業の比重が大幅に低下した。その主たる理由は、解放前の鉱山の地域的分布が北部に偏っていたためであり、このことは解放前後を接続した長期系列を検討する場合に十分配慮する必要がある。

鉱山以外で生産される鉱業生産物のうち砂利採取は解放前後を通じて無視できない水準にある。しかし、解放前の土石採取業についてのデータは極めて少ないが、朴(2006)では『統計年報』の林業統計からデータが得られることを指摘している。

表2には『統計年報』から引用される統計数値が示されている。推計にあたっては、ベンチマーク年の数値を、建設活動の指標で延長する等の方法が考えられる。また天日製塩は鉱業に含まれるが、工産品系列に含まれる塩は加工塩と思われるので、別途の配慮が必要である⁽⁷⁾。これらのデータを地域別に推定するには、若干の追加作業が必要であるので本論では推計されていない。

解放後韓国の鉱工センサスは1955年に引き続き1958, 1960, 1963年に行われ、1966年以降毎年実施されるようになった鉱工業センサスによって大幅に改善された。国民経済計算や産業連関表もセンサスを利用していることを考えると少なくとも名目額についてはセンサスの結果を重視する必要がある。国民経済計算は改定時に断続がみられるが、少なくとも鉱業の名目値については、ほとんど問題がない。一方、実質値については、国民経済計算の連結を試みる方法と生産指数を利用する方法が考えられる。前者については、表鶴吉ソウル大学教授による作業が進行中であるので⁽⁸⁾、その公表を待つことにし、本論では生産指数による方式を採用することにした。

2. 解放前の鉱業生産（1911～1936年）

既述のように、解放前の韓国（朝鮮半島）の鉱業生産に関するデータは、『統計年報』に含まれる「鉱産額」統計と、『趨勢』から得ることができる。前者からは、原則として鉱産物別の生産金額と生産数量の情報を道別に得ることができ、本論の目的のためには便利であるが、その期間は1911～36年に限定されている。（各年の統計のオリジナルは、上記の博士論文の添付フォルダ「第4章CD」に保存されている⁽⁹⁾。以下、記述の混乱を避けるためCD1と呼ぶ）。また、1941年版の『趨勢』からは、1932～40年までの情報を得ることができるが、この資料には、製品別には生産金額と生産数量の「全韓国合計値のみ」が、道別には「生産金額合計値のみ」が、別々の表に示されており、道別製品別に生産金額と生産数量が得られる『統計年報』と比較すると、『趨勢』から得られる情報は限定されている。このため、1911～36年については、基本的により詳細に数値情報の得られる『統計年報』の情報をもとに推計を行い、この推計結果に1941年版の『趨勢』から得られる情報から推計される生産金額を接続することで1911年～40年までの推計作業を行うこととする。

このことを考慮して、以下では、1911～40年の推計期間のうち、利用される統計別、期間別に

- (A) 『統計年報』の「鉱産額」統計（1911～36年）に関わる作業、

(B) 1941年版の『趨勢』(1932~40年)に関わる作業

(C) 解放前後の生産データに接続

の3つに分け、本節では(A)の問題を取り扱う。

『統計年報』からは、原則として鉱産物別の生産金額と生産数量の情報を道別に得ることができることは既述のとおりであるが、例えば1912年のように品目別合計のみが示され、各道別に数値が得られない場合や、1915年のように本来記載されるべき全羅南道の数値が欠落している等の問題も存在し、その利用には、注意しなければならない点も存在する。しかしながら、これらの2系列とそれから導かれる実効単価を道別に時系列として並べてみると、製造業の場合と相違して比較的安定した動きがみられ、補間等で修正が必要な数値はあまり見いだせない。

つぎに「鉱産額」統計にみられる品目と「鉱業」として扱う範囲について検討する。鉱産物の製品化の作業は、鉱石の発掘と鉱石の精錬にわかれる。しかし、解放前の韓国では鉱山レベルで2作業が連結して実施されているため、出荷を製品単位で示すことが多い。このことから溝口・梅村(1988)⁽¹⁰⁾では精錬業を含む鉱産物を鉱業の生産活動として取り扱っている。朴(2006)⁽¹¹⁾はこれに修正を加え、鉱山を有しない独立精錬所は製造業に属するとして製造業に移管した。この場合、独立精錬所が原材料として使用した鉄鉱等を鉱業に残す必要があり詳細な検討が行われている。)われわれにとって都合なのは、道別統計に含まれる鉄鉱石には、銑鉄、鉄鋼製品の加工に提供された鉄鉱石を含んでいるので、銑鉄、鉄鋼製品の生産額を単純に製造業に移すだけでよいことになる。同様な問題は、「金銀銅鉱」と「金銀銅」のように原材料と製品の両方が示された品目は「鉱産額」統計にはいくつか存在するが、これらの生産が採鉱から精錬まで一貫作業として小規模事業所で実施されているケースが多いことを考慮して鉱石生産額と製品生産額の合計を鉱産品とした。ただこの場合、独立精錬所(鎮南甫精錬所)へ原材料として供給された鉱石が重複計算となるので、重複部分を大雑把な目安として金銀生産の10%と仮定して処理した(今後、新しい情報が発見されれば修正を行うことはやぶさかではない)。これ以外の品目については、鉱石、鉱産物製品ともに鉱業生産として処理した。砂利の推計には、建設統計と整合性を持つように推計を行う必要があるため、上記COEプロジェクトの進行に合わせて再検討したい。

「鉱産額」統計についても、「工産物」統計と同様に、金額と数量系列について道別統計が1912年以外の年に得られ、それを合計した形で全朝鮮値も示されているが、1911年京畿道および全羅北道、1915年全羅南道、1919年および1920年の全羅北道について未表記である。このうち1915年の全羅南道と1919年および1920年の全羅北道

表3 道別数値と全朝鮮数値との不整合

年	修正箇所		対 応	備 考
1913				平安南道の銀(匁)に対応する金額未記入, 時系列で補間。
1914	平安南道	石炭(噸)	未記入→159646	トータルチェックで修正(数字の補間: 時系列で確認済み)
	平安南道	石炭(円)	未記入→713775	トータルチェックで修正(数字の補間: 時系列で確認済み)
1915	全羅南道なし (項目なし)			
1919	全羅北道なし (項目なし)			
	平安北道	粗鉛(円)	243562→243592	トータルチェックで修正
1920	全羅北道なし			
	金銀鉱(貫)	全朝鮮(総計)	5721756→5721256	各道の値を合計して修正。
	平安北道	亜鉛鉱(円)	65555→65550	トータルチェックで修正
	忠清北道	黒鉛(円)	17373→17375	トータルチェックで修正
	忠清北道	価額合計	131959→31959	トータルチェックで修正(時系列で確認済み)
1924	黄海道	銅鉱	数字を黄海道→慶尚南道へ移動。	トータルチェックで修正
1926				平安北道の亜鉛鉱(貫)に対応する金額未記入, 時系列で補間。
				江原道の亜鉛鉱(円)に対応する数量未記入, 時系列で補間。
1927	慶尚北道	銅鉱	数字を慶尚北道→慶尚南道へ移動	トータルチェックで修正
1930	平安北道	硅砂	数字を平安北道→黄海道へ移動	トータルチェックで修正
1931	価額合計, 金銀鉱, 汰鉱, 鉄鉱			注記あり(二重計算:「各道の合計」を合計値とする)
	金(瓦)	全朝鮮(総計)	→8546164	各道の値を合計して修正。
	汰鉱(匁), (円)	全朝鮮(総計)	未記入→各道の合計値	修正
	価額合計	平安南道	→5291990	品目の合計で修正。
1932	価額合計, 金銀鉱, 汰鉱			注記あり(二重計算:「各道の合計」を合計値とする)
1933	総価額, 金銀鉱			注記あり(二重計算:「各道の合計」を合計値とする)
1934	総価額, 金銀鉱			注記あり(二重計算:「各道の合計」を合計値とする)
				京畿道の硫化鉄鉱(円)に対応する数量がゼロ。時系列で補間。
1935	総価額, 金銀鉱, 鉄鉱, 銅鉱			注記あり(二重計算:「各道の合計」を合計値とする)
1936	総価額, 金銀鉱, 鉄鉱, 銅鉱			注記あり(二重計算:「各道の合計」を合計値とする)

の欠落値については、品目別の生産金額・数量とも欠落年の前後の年の値で補間することにした。すなわち、両道の鉱業生産は毎年それほど大きくないにしても、すべての当該年の鉱産物生産が0であるとするのは不自然であり、報告ないし集計作業過程で欠落したとみなすほうが蓋然性が高いからである。1911年の値については、

表4 主たる補間, 修正箇所

品目	年	該当の道	補間, 修正	方法
金	1915年	全羅南道*	金額・数量の補間	前後年平均を利用
金	1919年	全羅北道*	金額・数量の補間	前後年平均を利用
金	1920年	全羅北道*	金額・数量の補間	前後年平均を利用
金銀鋳	1919年	全羅北道*	金額・数量の補間	前後年平均を利用
金銀鋳	1920年	全羅北道*	金額・数量の補間	前後年平均を利用
銀	1913年	平安南道	金額の補間	他道の平均単価を利用
銅鋳	1923年	全羅南道	数量の修正	数量10倍
銅鋳	1924年	全羅南道	数量の修正	数量10倍
亜鉛鋳	1930年	黄海道	金額の修正	金額10倍
亜鉛鋳	1926年	平安北道	金額の補間	他道の平均単価を利用
亜鉛鋳	1926年	江原道	数量の補間	他道の平均単価を利用
鉄鋳	1934年	黄海道	金額・数量の補間	前後年平均を利用
硫化鉄鋳	1934年	京畿道	数量の補間	前後年平均を利用
硫化鉄鋳	1932年	京畿道	数量の修正	数量100倍
硫化鉄鋳	1931年	京畿道	数量の修正	数量100倍
硫化鉄鋳	1930年	京畿道	数量の修正	数量100倍
硫化鉄鋳	1929年	京畿道	数量の修正	数量100倍
硫化鉄鋳	1928年	京畿道	数量の修正	数量100倍
タングステン鋳	1936年	京畿道	数量の修正	数量1000倍
タングステン鋳	1936年	忠清北道	数量の修正	数量1000倍
タングステン鋳	1936年	忠清南道	数量の修正	数量1000倍
タングステン鋳	1936年	慶尚北道	数量の修正	数量1000倍
タングステン鋳	1936年	黄海道	数量の修正	数量1000倍
タングステン鋳	1936年	平安南道	数量の修正	数量1000倍
タングステン鋳	1936年	平安北道	数量の修正	数量1000倍
タングステン鋳	1936年	江原道	数量の修正	数量1000倍
タングステン鋳	1932年	江原道	金額・数量の補間	前後年平均を利用
タングステン鋳	1936年	咸鏡南道	数量の修正	数量1000倍
水鉛鋳	1926年	江原道	金額・数量の補間	前後年平均を利用
安質母尼	1934年	平安南道	金額・数量の補間	前後年平均を利用
黒鉛	1936年	忠清北道	数量の修正	数量1000倍
黒鉛	1919年	忠清北道	金額・数量の補間	前後年平均を利用
黒鉛	1916年	忠清北道	金額・数量の補間	前後年平均を利用
黒鉛	1915年	忠清北道	金額・数量の補間	前後年平均を利用
黒鉛	1936年	全羅南道	数量の修正	数量1000倍
黒鉛	1936年	慶尚北道	数量の修正	数量1000倍
黒鉛	1916年	慶尚北道	金額・数量の補間	前後年平均を利用
黒鉛	1936年	黄海道	数量の修正	数量1000倍
黒鉛	1936年	平安南道	数量の修正	数量1000倍
黒鉛	1922年	平安南道	金額・数量の補間	前後年平均を利用
黒鉛	1918年	平安南道	金額・数量の補間	前後年平均を利用
黒鉛	1936年	平安北道	数量の修正	数量1000倍
黒鉛	1936年	江原道	数量の修正	数量1000倍
黒鉛	1934年	江原道	金額・数量の補間	前後年平均を利用
黒鉛	1936年	咸鏡南道	数量の修正	数量1000倍
黒鉛	1936年	咸鏡北道	数量の修正	数量1000倍
雲母	1933年	平安北道	金額・数量の補間	前後年平均を利用
雲母	1934年	咸鏡南道	金額・数量の補間	前後年平均を利用
雲母	1928年	咸鏡南道	数量の修正	数量10倍
雲母	1920年	咸鏡南道	金額・数量の補間	前後年平均を利用
高嶺土	1926年	京畿道	金額・数量の補間	前後年平均を利用
高嶺土	1934年	全羅南道	金額・数量の補間	前後年平均を利用
高嶺土	1917年	慶尚北道	数量の修正	数量1/100
高嶺土	1917年	慶尚南道	数量の修正	数量1/100
高嶺土	1921年	咸鏡北道	金額・数量の補間	前後年平均を利用
硅砂	1935年	慶尚南道	金額・数量の補間	前後年平均を利用
蠟石	1934年	慶尚南道	金額・数量の補間	前後年平均を利用
蠟石	1932年	咸鏡南道	金額・数量の補間	前後年平均を利用

(注) *は、合計が0となる道の補間。

1912年の統計表が簡易なものであることにも着目して、作業を1913年以降に限定することにした。

これらの調整以外に、各道の合計値と「全朝鮮」値が一致していない箇所のうち主要なものを整理すると表3となる。金額については各品目の合計が道別に価額合計として示されており、一方で各道別の合計が総計（全朝鮮値）として品目別に集計されていることから、これらの2種のトータルチェックによって、その不一致の原因の一部を突き止めることができる。その原因が不明な部分については、各道の値が正しく、全朝鮮値が間違っているとして、全朝鮮値を修正した。なお、例えば1936年の「銅鉱」には「重複計算」を避けるために、各道の合計値と総数が符合しないとの脚注が「鉱産額」統計に示されているが、この種の「不一致」については、脚注を無視して全朝鮮値を修正した。

組み換えの過程で、各年別統計の数量単位について単位表記を一致させるため

$$1 \text{ 貫} = 1000 \text{ 匁} = 3.75 \text{ kg}, \quad 1 \text{ 斤} = 160 \text{ 匁} = 600 \text{ g}, \quad (1 \text{ 匁} = 3.75 \text{ g})$$

として、単位の換算を行った。次に、製品別金額、数量の系列の変化をみるために時系列へ組み替えてみるとCD2となり、金額と数量から計算される実効単価の値も併せて示している。

CD2に見られる数値を道別に検討すると、金額、数量ともに経年の変化が大きいが、実効単価の推移は比較的安定しており、数値の修正が必要と判断される箇所はわずかである。また、金額および数量の補間については、全朝鮮値での金額の推移が比較的安定していることから、表4に示した箇所に対してのみ、その道に対する前後年の平均値を用いて補間作業を行った。したがって、結果的に数値の修正および補間等の追加的作業は最小限となっており、その数値はほぼ「鉱産額」統計のオリジナルのままである点で、補間、修正等が多く必要とされた「工産物」統計とは性格が異なる。表5(a)には上記の修正を加えてまとめた主要な名目生産額表が示されている。

また、鉱産物の鉱山の所在地別に現在の韓国領域とその北部とに分割を行ったが、京畿道、江原道の分割計算には、文(2006)の人口比を利用した。図1は主要産物別に南北の生産額(1935年値)を比較したものであるが、解放前の鉱業が北部にかたよっていた状況を読みとることができる。

表5(b)には、1935年価格による実質値が示されている。実質値の計算にあたっては、各道別の1935年に実効単価で他の年の数量を評価する方式をとった。近年、実質額の計算には連鎖指数法が利用されることが主流となっているが、この方法では道別系列と総合系列間の行列整合性が保障されないので、固定価格表示法を利用す

表5 全朝鮮・朝鮮南部の鉱目生産

(a) 名目生産額

名目生産額(円)	全朝鮮	「工産物」統計から移動						鉱業合計	参考朴推計	
産業分類番号	「鉱産額」統計合計①～⑥の合計	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	①～③全額と⑤の90%⑦の合計	非金属鉱⑧
		10	13	14	24	27	27	10		
		石炭	金属鉱	非金属鉱	亜硫酸	金銀銅	鉄鉄鋼	炭素製品、煉炭、木炭		
1913	8110412	574526	669087	238920	0	6627879	0	114905	7562530	6693000
1914	8402649	739791	879814	124664	0	6658380	0	147958	7884769	6653000
1915	10526296	997746	1798759	235269	0	7494522	0	199549	9976393	7489000
1916	14107579	819221	4434916	456742	0	8396700	0	163844	13431753	8397000
1917	17058102	1149532	4864164	1350692	0	9693484	230	229906	16318430	9693000
1918	30844603	1315873	4463703	641417	0	9052130	15371480	263175	14831085	9052000
1919	25440320	2124831	6564517	335084	0	6247284	10168605	424966	15071953	6235000
1920	24222662	3917153	6853509	385320	0	4799857	8266823	783431	16259284	4790000
1921	15551520	3192262	3830793	324580	0	3374042	4829843	638452	11022725	3374000
1922	14526158	2531436	2841928	422957	10472	3664236	5055129	506287	9600421	3664000
1923	17326894	2750214	4026135	360944	199091	4306398	5684112	550043	11563094	4306000
1924	19176462	2961247	4853208	600003	147540	5048754	5565710	592249	13550586	5049000
1925	20876964	4548535	3565995	552264	84371	6739310	5386489	909707	15641880	6482000
1926	24133380	4992699	3424917	513499	0	9243325	5958940	998540	18248647	8477000
1927	24169229	5286318	4366883	627356	0	7365322	6523350	1057264	17966610	6668000
1928	26434972	5769289	5209112	749304	0	7054343	7652924	1153858	19230472	5912000
1929	26488366	6321485	5201717	754104	0	7415726	6795334	1264297	20215756	5934000
1930	24680473	5327966	4630277	668828	0	8130331	5923071	816887	18761256	6667000
1931	23685327	5190064	3389712	487506	0	10029158	4588887	1261330	19354854	8358000
1932	36445943	5970119	5181402	617937	0	20562473	4114012	3970112	34245795	15481000
1933	52401344	7205406	7849633	1070521	15846	30654247	5605691	4184239	47898621	22724000
1934	77017229	9940566	12526512	1371495.5	32009	41245698	11900948	5061575	66021277	26907000
1935	104700330	11925149	26504179	2186601	46657	49941278	14096466	5527817	91090896	31031000
1936	134353837	13301027	38100519	2275215	26278	66251174	14399624	7192216	120495034	36410000
1937	118678000	15129000	50569000		0	0		7870908		52980000
1938	164683000	25468000	69989000		0	0		10341900		69226000
1939	197917000	37807000	91029000		0	0		16209156		69081000
1940	224716000	62797000	110916000		0	0		36384393		51003000

(出所) 1913-36は『統計年報』から推計。1937-40は朴(2006)。

(注1) 鉄鉄鋼全額と金銀銅生産額の10%は製造業金属製品へ移動。亜硫酸は製造業化学製品へ移動。

(注2) 斜字は、仮推計。「工産物」統計は、1930年以降について検討したため、1929年以前の数字は、石炭の値を膨らませた)

名目生産額(円)	朝鮮南部						〔工産物〕統計から移動	鉱業合計	
	「鉱産額」 統計合計 ①～⑥の 合計	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	
		10	13	14	24	27	27	10	
産業分類番号		石炭	金属鉱	非金属鉱	亜硫酸	金銀銅	銑鉄鉄鋼	炭素製品、煉炭、木炭	①～③全額 と⑤の90% ⑦の合計
1913	1116168	0	103834	65173	0	947161	0	34472	1055924
1914	1042888	0	88717	33023	0	921149	0	44387	995161
1915	1623101	0	167000	28552	0	1427550	0	59865	1540211
1916	2426189	0	508378	35159	0	1882652	0	49153	2287077
1917	2227812	0	719543	157708	0	1350393	169	68972	2161576
1918	2698266	0	1345707	70930	0	1281628	0	78952	2649055
1919	1174244	0	575907	118931	0	479407	0	127490	1253793
1920	1215369	3504	483449	139266	0	589150	0	235029	1391483
1921	1063290	19850	429386	129593	0	484460	0	191536	1206379
1922	938930	3399	343091	135613	10472	441869	4487	151886	1031670
1923	1400985	28642	415147	137244	199091	620861	0	165013	1304821
1924	1549004	25380	597661	167810	140040	618112	0	177675	1524827
1925	1629316	34448	731872	184631	78013	600352	0	272912	1764180
1926	1996668	41437	820528	206153	0	928549	0	299562	2203375
1927	1972258	33619	782897	218811	0	936931	0	317179	2195744
1928	2103895	37599	959789	343929	0	762578	0	346157	2373795
1929	1732137	46095	833740	355678	0	496624	0	379289	2061763
1930	2266685	23590	893561	305395	0	1044139	0	71235	2233506
1931	2768414	29314	991061	213100	0	1534939	0	351332	2966252
1932	6934974	33557	1718238	260350	0	4922830	0	1274251	7716942
1933	11909047	80748	2612266	518079	15458	8682496	0	1394378	12419718
1934	17395321	123998	3888945	696185	31610	12654584	0	1748485	17846738
1935	22054825	101748	6555259	1094201	45593	14258024	0	2322048	22905478
1936	29931350	191418	9752444	1169421	26278	18791790	0	3027731	31053625
1937	0	0	0	0	0	0		3126989	
1938	0	0	0	0	0	0		4636389	
1939	0	0	0	0	0	0		7394641	
1940	0	0	0	0	0	0		13041887	

(注) 斜字は、仮推計。(「工産物」統計は、1930年以降について検討したため、1929年以前の数字は、仮推計)

表5(b) 実質生産額

実質生産額 (円:1935年価格)	全朝鮮							〔工業物〕統計から移動 ⑦	鉱業合計 ①~③全額 と⑤の90% ⑦の合計						
	〔鉱産額〕統計 合計	①		②		③				④		⑤		⑥	
		10	13	14	24	27	27			10					
産業分類番号	①~⑥の合計	石炭	金属鉱	非金属鉱	亜硫酸	金銀銅	鉄鉄鉄鋼	炭素製品, 煉炭, 木炭							
1913	21815193	862304	4171870	270933	0	16510087	0	172461	20336646						
1914	20547068	1104385	2687516	134474	0	16620693	0	220877	17601876						
1915	25093127	1524023	4438923	169464	0	18960718	0	304805	23501860						
1916	31996310	1266770	8667594	505953	0	21555993	0	253354	30094065						
1917	33476031	1293338	9382249	3980131	0	18819812	501	258668	31852216						
1918	28102388	1236545	7348078	453258	0	16945898	2118609	247309	24536498						
1919	34469229	1420579	17094761	349775	0	11695679	3908435	284116	29675342						
1920	26421043	1850811	9013135	343233	0	10987895	4225969	370162	21466446						
1921	22557103	1995397	7892080	254185	0	8283563	4131878	399079	17995949						
1922	22371457	2000448	5464302	468501	7082	10297920	4133205	400090	17601469						
1923	26485820	2351042	6449595	412493	74863	12239305	4958521	470208	20698713						
1924	28031647	2489812	7026791	500436	63902	12999031	4951674	497962	22214130						
1925	28933229	3909573	4324920	537324	85058	15018596	5057758	781915	23070468						
1926	41825635	4252582	7901325	582905	0	23228784	5860039	850516	34493234						
1927	34743369	4423578	4771360	692768	0	18453791	6401873	884716	27380833						
1928	36706846	5093141	6703827	846193	0	16687802	7375883	1018628	28680811						
1929	38338586	5826357	6132739	947386	0	17715739	7716365	1165271	30015918						
1930	39670975	5443649	6157328	872420	0	19686435	7511143	710589	30901778						
1931	62749133	5732607	19899048	630093	0	29151048	7336337	1227810	53725502						
1932	55207348	6816783	7694471	832488	0	31743397	8120209	5127828	49040627						
1933	64302639	7957229	9309652	1191209	19025	37691222	8134301	5223828	57604018						
1934	79735252	10213796	13026950	1740306	41678	41859552	12852971	5667935	68322584						
1935	104700330	11925149	26504179	2186601	46657	49941278	14096466	5527817	91090896						
1936	124229303	13278831	33848360	2260208	29047	61054268	13758590	6471005	110807244						

実質生産額 (円:1935年価格)	朝鮮南部							〔工業物〕統計から移動 ⑦	鉱業合計 ①~③全額 と⑤の90% ⑦の合計						
	〔鉱産額〕統計 合計	①		②		③				④		⑤		⑥	
		10	13	14	24	27	27			10					
産業分類番号	①~⑥の合計	石炭	金属鉱	非金属鉱	亜硫酸	金銀銅	鉄鉄鉄鋼	炭素製品, 煉炭, 木炭							
1913	5088330	0	2579739	84636	0	2423956	0	51738	4897673						
1914	2732863	0	232293	38274	0	2462296	0	66263	2552897						
1915	4028172	0	240264	32257	0	3755651	0	91441	3744048						
1916	5763889	0	581304	42930	0	5139655	0	76006	5325929						
1917	5178031	0	1292045	386481	0	3499138	368	77600	4905350						
1918	5454576	0	2088154	102703	0	3263719	0	74193	5202397						
1919	2847222	0	1383177	147993	0	1316052	0	85235	2800851						
1920	2995340	2234	1015706	154145	0	1823255	0	111049	2924063						
1921	2687814	13038	1289147	112858	0	1272772	0	119724	2680261						
1922	2376474	2452	667425	163661	7082	1532189	3665	120027	2332535						
1923	3315822	20663	751726	160123	74863	2308447	0	141063	3151177						
1924	2867247	16492	974681	179533	59873	1636668	0	149389	2793096						
1925	3094307	25197	1166500	205999	78783	1617828	0	234574	3088315						
1926	7821247	28998	4617944	250329	0	2923976	0	255155	7784005						
1927	4946365	24553	1255399	268562	0	3397851	0	265415	4871995						
1928	4784583	28311	1840318	418109	0	2497846	0	305588	4840387						
1929	3198523	35436	913888	468761	0	1780438	0	349581	3370060						
1930	4835391	19840	1188743	383703	0	3243106	0	44050	4555131						
1931	21178197	24949	1554430	269574	0	5339334	0	382417	21026680						
1932	10588309	31695	1978449	406454	0	8171711	0	1331796	11102933						
1933	14251077	73537	3051639	582833	18410	10524658	0	1399711	14579912						
1934	17669515	125993	4011306	846112	41108	12644995	0	1641075	18004982						
1935	22054825	101748	6555259	1094201	45593	14258024	0	2322048	22905478						
1936	26771402	181020	8181403	1162291	29047	17217642	0	2421726	27442318						

表 5(c) 中分類別名目生産額

(単位：円) 全朝鮮

	鉱業	石炭	金属鉱	非金属鉱	金銀銅
1913	7562530	689431	669087	238920	5965091
1914	7884769	887749	879814	124664	5992542
1915	9976393	1197295	1798759	235269	6745070
1916	13431753	983065	4434916	456742	7557030
1917	16318430	1379438	4864164	1350692	8724136
1918	14831085	1579048	4463703	641417	8146917
1919	15071953	2549797	6564517	335084	5622556
1920	16259284	4700584	6853509	385320	4319871
1921	11022725	3830714	3830793	324580	3036638
1922	9600421	3037723	2841928	422957	3297812
1923	11563094	3300257	4026135	360944	3875758
1924	13550586	3553496	4853208	600003	4543879
1925	15641880	5458242	3565995	552264	6065379
1926	18248647	5991239	3424917	513499	8318993
1927	17966610	6343582	4366883	627356	6628790
1928	19230472	6923147	5209112	749304	6348909
1929	20215756	7585782	5201717	754104	6674153
1930	18761256	6144853	4630277	668828	7317298
1931	19354854	6451394	3389712	487506	9026242
1932	34245795	9940231	5181402	617937	18506226
1933	47898621	11389645	7849633	1070521	27588822
1934	66021277	15002141	12526512	1371496	37121128
1935	91090896	17452966	26504179	2186601	44947150
1936	120495034	20493243	38100519	2275215	59626057

(注) 斜字は、仮推計。「[工産物]統計は、1930年以降について検討したため、1929年以前の数字は、仮推計)

表 5(d) 道別鉱業名目生産額

(単位：円)

	京畿道	忠清北道	忠清南道	全羅北道	全羅南道	慶尚北道	慶尚南道	黄海道
1930	201917	133083	260585	385208	717342	256742	99993	3203268
1931	550895	90614	525484	335073	727656	320340	118673	1908473
1932	1279761	496060	2001011	669848	1066992	853588	201078	2710694
1933	1383493	1130682	3360191	1344554	1502381	1655039	275815	4484687
1934	1948425	1665739	4712345	2055859	1881483	2684195	516083	7180783
1935	2205624	2263771	5743276	3495440	1821516	4019144	700882	8666988
1936	3531752	2834065	8553856	4281952	2928721	4492503	1210105	11195774
	平安南道	平安北道	江原道	咸鏡南道	咸鏡北道	全朝鮮	朝鮮南部	
1930	5450857	4805383	268879	1282827	1695174	18761256	2233506	
1931	5689590	5588321	475314	1203645	1820775	19354854	2966252	
1932	10043170	8874966	1725900	2401427	1921300	34245795	7716942	
1933	13318902	11066092	2586202	3308576	2482006	47898621	12419718	
1934	19367216	11304044	3483747	5674270	3547088	66021277	17846738	
1935	27440015	15059901	3875698	11039548	4759094	91090896	22905478	
1936	35779479	20533488	4784212	13743865	6625262	120495034	31053625	

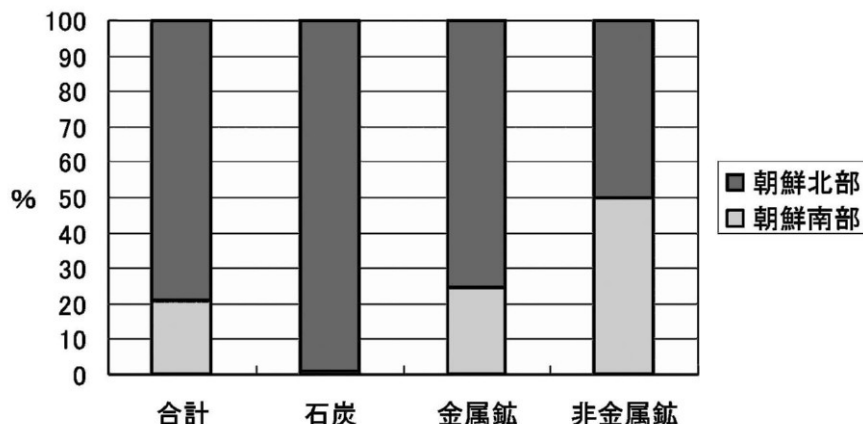


図1 主要産物の南北生産比率 (1935年)

ることとした。なお1935年の実効単価が得られないいくつかの品目については、主として時系列補間によって単価を推計した。実質値についての全朝鮮合計は、表5(b)の数値を合計することによって求められた。

表5(b)と表5(a)には、「鉱産額」統計の合計と併せて、製造業と鉱業との間の調整項目が示され、鉱業の合計が示されている。表5(c)は表5(a)を整理して得られる表であり、表5(d)には、道別の数値が示される。

最後に『統計年報』と『趨勢』の相違に触れる必要がある。これまでの数値は前者に採用された鉱産物について計算を行ってきたが、鉱産物合計金額をみると2者の間に大きな差がある。一方主要鉱産物である石炭と金属鉱の生産金額にはほとんど相違がないから、2者の差は「非金属鉱」の生産ということになる。表5(a)には『趨勢』から推計した朴(2006)の数値が参考欄に示されている。この相違の説明には、より詳細な検討が必要であり将来の課題となっている

3. 1941年版の『趨勢』(1932~40年)に関わる作業

既述のように、『昭和十六年、朝鮮鉱業の趨勢』は、戦争のため公式公刊されたものでなく、謄写版にみられる原稿の状態で作業は中断している。この資料から得られる情報は、

- (1) 昭和十六年鉱産額表(前年比較)(数量, 金額とその増減)
- (2) 鉱種別鉱産額累年比較(数量)
- (3) 同(金額)

(4) 道別鉱産価額累年比較

(5) 昭和十六年重要鉱山鉱産額表

の5種類である。

このうち、(2)、(3)、(4)には、累年比較として1932年～41年までの数値が示されており、前節での作業との接続が検討されるものである。(1)の情報は、(2)、(3)の1941年、1940年の数値チェックに利用され、(5)の情報は、鉱山を道別に集計して推計結果との比較に使用できる性格の情報である。したがって以下では、接続のために主として利用される(2)、(3)、(4)の表について検討を行う。

累年比較の数値が得られる1932～40年のうち、先に検討した『統計年報』と重なる年は、1932～36年である。これを踏まえ、各表を利用した推計作業に入る前に、『趨勢』と『統計年報』から得られる情報を比較してみよう。ここでは、実質生産額の基準年として採用される1935年について比較を行う。(4)道別鉱産価額累年比較には、『統計年報』の品目別金額の「合計値のみ」が、道別に示されている。したがって、道別の品目別の金額と数量が得られないので、前節と異なった接近法が必要になる。(なお、(4)と『統計年報』に公表されている1935年の数字は一致している。)

一方、(2)、(3)と統計年報を比較すると、『統計年報』のそれぞれの品目についての全朝鮮合計の金額・数量のみが示されている。(したがって「道別」の値は分らない)、『趨勢』のこれらの表と『統計年報』は、示される品目、数値ともにはほぼ一致している。『趨勢』には、(1)の表に脚注が見られるが、そのほかの表には脚注はない。ここで注意しなければならないのは、1935年の『統計年報』に示される金銀鉱、銅鉱、鉄鉱についての脚注であり⁽¹⁶⁾、(2)、(3)表の同品目では『統計年報』と数値が一致していることである。つまり、(2)、(3)の表の同品目は、各道の値をそのまま合計したものではなく、原料分を差し引いたかたちで計算されていることとなる⁽¹⁷⁾。一方で各道の合計値を示した(4)は、これらの3品目について、各道の生産実数が示されているので、(2)、(3)表とは異なる点にも注意が必要となる。(2)、(3)表に関して『統計年報』と異なる点は、①鉄鉱の値、②亜硫酸の金額が前者には示されていないこと、③黒鉛および石炭の表記方法である。このうち①については、どちらの表に示される数値が正しいのかは留保される事項であるとの理由で、修正は行っていない。②については、その数量は一致しているため、『統計年報』の金額で補間した。③については、前者は「黒鉛(鱗状)」、「黒鉛(土状)」、「石炭(無煙)」、「石炭(有煙)」が示されるが、後者には「石炭」、「黒鉛」の2種類のみが示される。幸い、前者のそれぞれを合計すると前者と数量・金額とも一致するので、合計して利用する。

以上のように、1935年の値を比較すると、『統計年報』と『趨勢』の値はほぼ一致

表6 『趨勢』一表(2), 表(3)一の修正箇所

品目	年	修正	方法
金銀鉱	1940	金額の修正	1939年実効単価を利用
金銀鉱	1941	金額の修正	1939年実効単価を利用
銅鉱	1938	実効単価の作成	実効単価の得られる品目のデフレータ(総合)を接続
銅鉱	1939	実効単価の作成	実効単価の得られる品目のデフレータ(総合)を接続
銅鉱	1940	実効単価の作成	実効単価の得られる品目のデフレータ(総合)を接続
銅鉱	1941	実効単価の作成	実効単価の得られる品目のデフレータ(総合)を接続
銅	1940	数量の修正	数量1000倍
銅	1941	数量の修正	数量1000倍
鉛	1940	数量の修正	数量1000倍
鉛	1941	数量の修正	数量1000倍
水銀	1937	実効単価の補間	前後年平均で補間
タングステン鉱	1936	数量の修正	数量1000倍
タングステン鉱	1937	数量の修正	数量1000倍
タングステン鉱	1939	数量の修正	数量1000倍
タングステン鉱	1940	数量の修正	数量1000倍
タングステン鉱	1941	数量の修正	数量1000倍
亜硫酸	1935	金額の修正	『年報』の数字を利用(数量一致のため)
亜硫酸	1936	金額の修正	『年報』の数字を利用(数量一致のため)
亜硫酸	1937	実効単価の作成	実効単価の得られる品目のデフレータ(総合)を接続
亜硫酸	1938	実効単価の作成	実効単価の得られる品目のデフレータ(総合)を接続
亜硫酸	1939	実効単価の作成	実効単価の得られる品目のデフレータ(総合)を接続
亜硫酸	1940	実効単価の作成	実効単価の得られる品目のデフレータ(総合)を接続
亜硫酸	1941	実効単価の作成	実効単価の得られる品目のデフレータ(総合)を接続
安質母尼鉱	1939	数量の修正	数量1000倍
安質母尼鉱	1940	数量の修正	数量1000倍
安質母尼鉱	1941	実効単価の補間	前年と同一と仮定
硅砂	1938	金額の修正	前後年平均で補間

(注) 網かけの品目については、実質生産額の推定のための作業

しているから、接続の可能性は十分考えられる。

つづいて、『趨勢』の1935年(基準年)および1936年以降について品目別に金額、数量とそこから計算される実効単価の変化を時系列で見てみよう。実効単価を見るとほとんどの品目で比較的安定しているが、一部の品目については、数値を回答する際に単位を間違えて回答したと思われる箇所も存在するので表6のような修正を行った。

名目生産額については、(4)表から道別生産額が得られ、その数値自体には問題がないと思われるが、前節系列との接続を考える場合、製造業への金額移行に伴う修正が必要になる。そこで、1937~40年の道別系列について、1935年の『統計年報』の推計から、原生産額と修正金額との比率を道別に計算しこの比率が1937~40年にも妥当すると想定して名目生産額の道別値を推定すると表7(a)が得られる。つぎに実質生産額については、計算に工夫が必要である。ここでは、以下の方法で(4)表に対応する道別実質生産額を得る計算を行った。

表 7(a)

『趨勢』(表C) (鉱業分一比率調整済み)

名目生産額 (単位:円)

	京畿道	忠清北道	忠清南道	全羅北道	全羅南道	慶尚北道	慶尚南道
1932	688418	420127	1927386	637104	939676	765976	55352
1933	761943	1065469	3305146	1290831	1408069	1518599	139073
1934	1270740	1589697	4702680	1995012	1764620	2453049	282844
1935	1123599	2172380	5669886	3431516	1672363	3675464	437111
1936	1953723	2734583	8492771	4132343	2768901	4069367	842834
1937	2932670	3792768	10323813	6163470	4113647	8405672	1649369
1938	3773061	5956017	15746280	7246643	7668980	8743166	2337223
1939	3338372	7108396	18167499	7916417	7661793	8773409	3259457
1940	6787258	6906423	16217533	5523167	6599567	6538939	1966132
1941	18351984	6827163	12631548	5194378	6553931	6829851	4866434

	黄海道	平安南道	平安北道	江原道	咸鏡南道	咸鏡北道	合計
1932	2336855	8512175	8961676	1536164	1910357	1721362	30412629
1933	3524835	11822378	11104155	2363005	2915929	2263848	43483281
1934	6277300	17627914	11152953	3149099	5582554	3247817	61096279
1935	7932711	25763978	14865455	3401764	10871619	4543761	85561606
1936	8984053	34534828	19665970	4265951	13617548	5667937	111730809
1937	11877467	22640555	25777616	6429809	10231203	7372018	121710075
1938	16915957	29218093	31564620	8755218	12164227	12521125	162610610
1939	19307272	37695154	34340323	11781310	18693671	17403796	195446869
1940	18059167	53620718	33110144	16603341	22452175	90494481	284879044
1941	23916541	47909565	34084298	20202067	21044943	102913949	311326651

(注)「工産物」統計からの移動分を含まず。

表 7(b)

実質生産額 (単位:円 1935年価格表示)

	京畿道	忠清北道	忠清南道	全羅北道	全羅南道	慶尚北道	慶尚南道
1935	1123599	2172380	5669886	3431516	1672363	3675464	437111
1936	1805563	2611144	7842362	3826930	2372582	3797779	766671
1937	2524470	3169788	8775367	5121153	3239898	7360640	1407603
1938	3249270	4327165	13131059	5605635	6986204	7642380	2131497
1939	2967315	5148837	15646098	6080617	6996413	7784099	2937428
1940	5907843	4733142	13633493	4042740	5841095	5711904	1697481
1941	15952277	4272033	10593491	3831711	5058448	5829221	4080892

	黄海道	平安南道	平安北道	江原道	咸鏡南道	咸鏡北道	合計
1935	7932711	25763978	14865455	3401764	10871619	4543761	85561606
1936	8647259	33027558	18196207	3945596	12723935	5680177	105243762
1937	9704570	19786280	22246618	4889718	8814949	6926225	1039627279
1938	12157526	23894151	26924776	6223749	10388711	10248198	132910320
1939	13402525	29560226	29381592	7902314	16040776	12180872	156029110
1940	10311752	38455761	27972068	10661870	16254916	53739849	198963916
1941	11869098	33239917	28411339	11916630	14103565	58917349	208075970

(注)「工産物」統計からの移動分を含まず。

- ①(2), (3)表から全朝鮮平均の実効単価が得られるので、
 ②品目別の1935年基準指数 (1935=100) を作り、
 ③1935年の『統計年報』の道別生産金額構成比で加重平均することによって、道別デフレータを得る。
 ④(4)表の名目生産額を③で得た道別デフレータで割って道別実質金額を得た。
 この結果は、表7(b)に示されている。

4. 解放前後の接続

既述のように解放後の韓国鉱業については1955年センサス以降信頼できるデータが得られる。このことを考慮して、本節の長期系列作成には1955年以降のデータに限定することにしよう。既述のように、韓国では鉱工業センサスが実施されているので、名目額の数値を接続することは容易である。表8には、センサスから得られる名目生産額を3中分類別に5年毎の数字が比較されている。なお名目額は、解放

表8 鉱業生産の解放前後比較

	名目(解放前円:解放後10万ウォン)				実質(円:1935年価格)
	合計	石炭	金属鉱	非金属鉱	合計
全朝鮮					
1915	9976393	997746	1798759	235269	23501860
1920	16259284	3917153	6853509	385320	21466446
1925	15641880	4548535	3565995	552264	23070468
1930	18761256	5327966	4630277	668828	30901778
1935	91090896	11925149	26504179	2186601	91090896
朝鮮南部					
1915	1540211	0	167000	28552	3744048
1920	1391483	3504	483449	139266	2924063
1925	1764180	34448	731872	184631	3088315
1930	2233506	23590	893561	305395	4555131
1935	22905478	101748	6555259	1094201	22905478
韓国					
1955	1050	546	416	89	14904
1960	5131	3499	1237	395	50014
1970	53260	27902	13537	11822	104658
1980	538251	349080	71216	117955	163164
1990	1309326	680802	56486	572038	164559
2000	1694039	380718	20760	1292561	93766

(注) 解放前の合計には、表中の3分類のほか、金銀銅(「鉱産額」統計の90パーセント)と煉炭、木炭(「工産物統計」からの移動分)が含まれている。(表5参照)したがって、3分類と合計は一致しない。

前円, 解放後ウォンによる表示となっており, 同一単位にするには, 1ウォン=1000円の換算が必要である。

解放後実質生産額の推計には, 解放前後のベンチマーク年間の比較が行われる必要があり, 本節では1935年と1955年を採用する。比較は兩年の生産数量を1935年の全朝鮮に関する実効単価で評価する方式で生産指数を作成する接近法を基本的に採用し, この作業を表5に示した3中分類別に行う。このうち, 石炭産業については, 解放後の韓国の生産が無煙炭に限定されることから, 石炭全体の実効単価ではなく無煙炭の単価が採用されている。金属鉱についても数量データは豊富であり, 同様の作業が可能である。非金属鉱については得られるデータがやや不足みであるが, 鉱産物に占める比重が低いことから, 少数系列の結果に依存することにした。表8の実質系列は, このようにして求めた1930年価格表示の1955年値を, 韓国鉱工業指数の鉱業分に接続した結果が示されている。

5. 結語

以下では, これまでの作業を通じて得られた表の数字を用いて解放前の鉱業の様子を簡単に概観してみよう。この時期の鉱業の主要品目は, 石炭, 金属鉱, 非金属鉱の3品目であるので, これらの品目について観察する。どの品目についても, 1930年に入って, 金額の増加がみられる。これら3品目での名目金額の構成比を見ると, 非金属鉱のシェアは, 1910年代が10%程度, それ以降が5%程度で推移しており, 全体に占めるシェアは小さく, 動きも安定している。石炭および金属鉱については, 非金属鉱と比べると年ごとの変化が大きい。石炭, 金属鉱の5年ごとのシェアをみると, それぞれおおよそ, 1915年では, 33%, 60%, 1920年では, 35%, 61%, 1925年では, 52%, 41%, 1930年では, 50%, 44%, 1935年では, 29%, 65%で推移しており, 石炭は1915年ごろから1930年ごろまで, シェアを伸ばしたことが分かる。特に1925~32年については, 石炭の生産額は, 金属鉱の生産額を超えていた。その後, 石炭は, 1930年代前半までシェアを低下させるが, 再び増加傾向がみられる。

つぎに, これらの品目について, それぞれ南北分割を行ってみよう。石炭は, 全期間を通じて, ほぼ全部が朝鮮北部に偏っていたことが分かる。平安南道, 咸鏡北道の生産が大きく, これらの道が, 生産の中心を担っていた。金属鉱は, 1910年代と20年代前半には, おおよそ90%が朝鮮北部の生産であったが, それ以降, 20年代後半には80%程度になり, 1930年代には70%代へと変化している。シェアは低下しつつあるものの, 観察期間を通じて朝鮮北部に生産が偏っていることは明らかであ

る。朝鮮北部内で当初、黄海道での生産が朝鮮北部の生産のほぼ全体であったものが、平安南道，平安北道，咸鏡南道の生産シェアが増加し，黄海道の生産シェアには低下が見られる。非金属鉱は，当初，朝鮮北部に生産が偏っていたが，朝鮮南部のシェアが年毎に増加していき，1930年代にはおおよそ50%を占めるまでになった。慶尚南道のシェアが大きいが，忠清北道，全羅南道もシェアを伸ばしている。

注

- (1) 解放前においては，朝鮮半島全体，解放後については大韓民国の領域を「韓国」と呼ぶ。なお解放前の現韓国領に対応する地域については「朝鮮南部」の名称を使用することにしたい。
- (2) 課の名称は行政組織の変化によって，時期により若干相違している。
- (3) 公式の印刷物は1936年で終了している。ただし，1941年版の草稿が謄写刷で残っており，本論では，そこにみられる情報も利用して推計を行う。なお，この『昭和十六年，朝鮮鉱業の趨勢』の入手にあたっては，一橋大学金承美氏のご協力を得た。
- (4) 『統計年報』で情報が得られるのは，1911～36年に限定される。1937年以降については，1941年版の『趨勢』を利用するが，本文中に述べられるように，『趨勢』からは道別品目別の数値が得られないため，『統計年報』と同様の数値チェック等は困難であることから1937年以降の数値については，仮推計である。
- (5) この種のデータの所在は，木村光彦・安部桂司（2003）『北朝鮮の軍事工業化』，知泉書院で指摘されている。
- (6) 朴基柱（2006）『鉱業・製造業』，Nak Nyeon Kim (ed), *Economic Growth in Korea 1910-1945*, Seoul National University press. (in Korean), 第4章。なお同書は文浩一・金承美（訳），尾高煌之助・斉藤修（訳文監修）『植民地期朝鮮の国民経済計算 1910-1945』，東京大学出版会として刊行されている。
- (7) 1930年の『年報』に示された工産品について，「食塩（天日製塩を除く）」の記述がある。
- (8) その暫定結果は2006年12月の一橋大学におけるセミナーで報告されたが，推定値の利用は許可されていない。
- (9) 本文中に「CD○」で示される表は非常に大きな表であるため，紙数の制約から本論文には記載していないが，公表を前提とした用意があるため，必要とされる方は連絡されたい。
- (10) 各鉱山がもっている精錬設備については『朝鮮鉱業の趨勢』に鉱山別に記述されている。
- (11) 溝口敏行・梅村又次（1988）『旧日本植民地経済統計——推計と分析』，東洋経済新報社。
- (12) 本論文では解放前の朝鮮半島を「韓国」と表示している。ただ南北分割を論じる場合に混乱をさけるために，朝鮮半島全体を「全朝鮮」，現在の韓国領を「朝鮮南部」と記述することにするが，この記述法は政治的意味を有するものではない。
- (13) 分割にあたっては，現在の領域が，韓国領域として忠清北道，忠清南道，全羅北道，

全羅南道, 慶尚北道, 慶尚南道, 京畿道の一部, 江原道の一部, 朝鮮民主主義人民共和国の領域として黄海道, 平安北道, 平安南道, 咸鏡北道, 咸鏡南道, 京畿道の一部, 江原道の一部, となっていることを踏まえて計算を行った。

- (14) 文浩一 (2006) 「植民地期朝鮮の南北人口比——朝鮮総督府国勢調査資料の分割フォーマット」, (21世紀 Hi-Stat プロジェクトの DP として発表)。
- (15) 補間によって求めた実効単価を使用した品目・道を列挙すると以下のようになる。
 金鉱 (京畿道, 忠清北道, 忠清南道, 全羅北道, 慶尚北道, 慶尚南道, 黄海道, 平安南道, 平安北道, 江原道, 咸鏡南道), 金銅鉱 (忠清南道, 黄海道), 銀鉛鉱 (江原道), 銀銅鉱 (咸鏡北道), 汰鉱 (京畿道, 忠清北道, 忠清南道, 全羅南道, 慶尚北道, 慶尚南道, 黄海道, 平安南道, 平安北道, 江原道, 咸鏡南道, 咸鏡北道), 銅鉱 (京畿道, 全羅北道, 慶尚北道, 黄海道, 平安南道, 平安北道, 江原道, 咸鏡南道), 粗銅 (忠清南道, 全羅北道, 慶尚南道, 黄海道), 鉛鉱 (全朝鮮, 全羅南道, 慶尚南道, 黄海道, 平安南道, 平安北道, 咸鏡南道), 鉛 (平安北道), 亜鉛鉱 (京畿道, 忠清北道, 全羅南道, 慶尚北道, 慶尚南道, 平安南道, 江原道, 咸鏡南道), 鉄鉱 (京畿道, 江原道, 咸鏡北道), 銑鉄 (江原道, 咸鏡南道), 硫化鉄鉱 (全羅北道), 水鉛鉱 (黄海道), 金銀銅鉛亜鉛鉱 (全朝鮮, 京畿道, 忠清北道, 慶尚北道, 慶尚南道, 黄海道, 平安南道, 平安北道, 江原道, 咸鏡南道), 砒鉱 (全朝鮮, 慶尚北道, 咸鏡北道), 亜砒酸 (平安南道, 咸鏡北道), 安質母尼 (咸鏡南道), 黒鉛 (京畿道, 全羅南道), 石炭 (京畿道, 忠清南道), 雲母 (黄海道), 石綿 (京畿道, 忠清南道, 黄海道), 高嶺土 (慶尚北道), 硅砂 (京畿道), 螢石 (平安南道), 重晶石 (慶尚南道), その他 (全朝鮮, 京畿道, 全羅北道, 全羅南道, 慶尚北道, 慶尚南道, 黄海道, 平安南道, 平安北道, 江原道, 咸鏡南道)
- (16) 金銀鉱, 銅鉱, 鉄鉱について, 「鉱産額中累年比較ニオケル金銀鉱, 銅鉱, 鉄鉱ノ産額ハ統計ノ重複ヲ避クルタメ朝鮮内精錬所又ハ製鉄所ニ於イテ製鉄原料ニ供セラレタルモノハ之ヲ除外セルモ各道ニオケル産額ハ其ノ実数ヲ知ルタメ之ヲ重複計上セル結果彼比符合セズ。因ニ鎮南甫精錬所ニ於イテハ15,093,936円, 興南精錬所ニ於イテハ3,835,216円, 兼ニ浦製鉄所ニ於イテハ14,096,466円の産額アリタリ」との脚注がある。
- (17) したがって厳密に言えば, 1936年において, これらの(2), (3)表を利用した品目別実効単価と『統計年報』での各道を合計した合計値での品目別実効単価を比較することはできないが, 実効単価はほぼ同一であることから, (2), (3)の数値の修正を行うことはしない。